私と胸高鳴る人たち

青木崇高

体と向き合う「謡」の神髄

（前回に続き）時代劇映画「蜩ノ記」（2014年）の撮影までに、私には習得しなければならないものがあった。

早駆けの次に私が習うのは「謡」であった。「謡」を知らない私はまずスマホを取り出した。歌い、唄い、唱い、謡い―あった。「謡とは、能の言葉や台詞にあたるもの」。なるほど、たまにNHKで見たりするアレか。イヨ～、ポン！のやつか。大変失礼で無知な私であった。

制作スタッフから、650年続く能楽の一派、観世流梅若万三郎家の梅若紀長先生を紹介していただき、本格的に「謡」を習うこととなった。私は映画の後半で、友人の祝言（結婚式）に、能「高砂」の一節「四海波」を謡うことになっている。

稽古初日。先生とのご挨拶を済ませ、早速、稽古場へ。板張りの床に正座である。足の甲の骨が板に当たって痛い、イテテテ。

「では私が先に謡いますので、青木さまはそれより後に続いて謡ってくださいませ」。はい？　もうですか？

「しーかーいなみーしずかにて（四海波静かにて）　どうぞ」「え、あ、ーーかいなみーずか、てー！」「くにーもーおさまるときつかぜ（国も治まる時津風）」「ーおさまる、かぜ！」。15分も過ぎた頃、「先生すいません、足を崩してもよいでしょうか」。ダメダメな初日だった。

「青木さまは青木さまの音階というものがありますので、それをじっくり探していきましょう」

何かを習得するのに近道など存在しない。それは落語の時に心得ている。とにかく通い続けた。稽古を重ねるたび少しずつ「自分の音階」がどこにあるのか分かってきた。足のしびれにも耐えられるようになった。

ある日、喉の調子の悪い時があった。力まかせに自分の音階で謡っていると先生が、「青木さま、今日の調子なら低めでよろしいかと思います」。え、いいんですか。

「私も日によって調子というものが変わります。舞台ではその日の音階で謡います」

知らなかった。一流の表現者というのは常日頃から自分の体と向き合い、その機微を感じ取っているのだと思った。そういえば、ある歌手も言ってた。「二日酔いの時のライブではキーを2つ下げる」と。少し違うか。

遅々たる歩みだったが、2カ月通い続け、やっとのことで先生から「合格」をいただくことができた。

撮影の本番当日、梅若先生はわざわざ現場の福島県まで来てくださった。「祝言ですから、おめでとうという気持ちをきちんと込めればよいのです」。その言葉で緊張がほぐれた。友人を心から祝う気持ちで思い切り謡うことができた。

映画を観ていただければわかるが、早駆けも謡のシーンも全体に対してほんのわずかでしかない。しかし、役者は時間をかけてその技の習得に全力を尽くす。そしてその過程で見つけたものを丁寧に拾い上げ、役の心情や背景などに埋め込んでいく。すべてはその映画のそのシーンに説得力を持たせるため、である。

（俳優）

観世流梅若万三郎家

画・青木崇高